

Arcserve Unified Data Protection 10.x 環境構築ガイド

コンソール+復旧ポイント サーバ (フル コンポーネント) インストール編

はじめに	1
1. インストール.....	2
1.1 ARCSERVE UDP 10.3 のインストーラ (インストール モジュール) について.....	2
1.2 インストール前の確認.....	2
1.3 インストールの実行	4
1.4 コンソールへのログインとバージョンの確認	11
1.5 ライセンス キーの登録.....	21
2. 運用開始のための設定.....	23
2.1 環境設定ウィザード	24
3. 補足情報.....	31
3.1 インストールの種類	31
3.2 復旧ポイントサーバのセキュリティ強化.....	33
3.3 多要素認証の設定	34
4. 製品情報と無償トレーニング情報.....	39
4.1 製品情報および FAQ はこちら.....	39
4.2 トレーニング情報	39

改定履歴

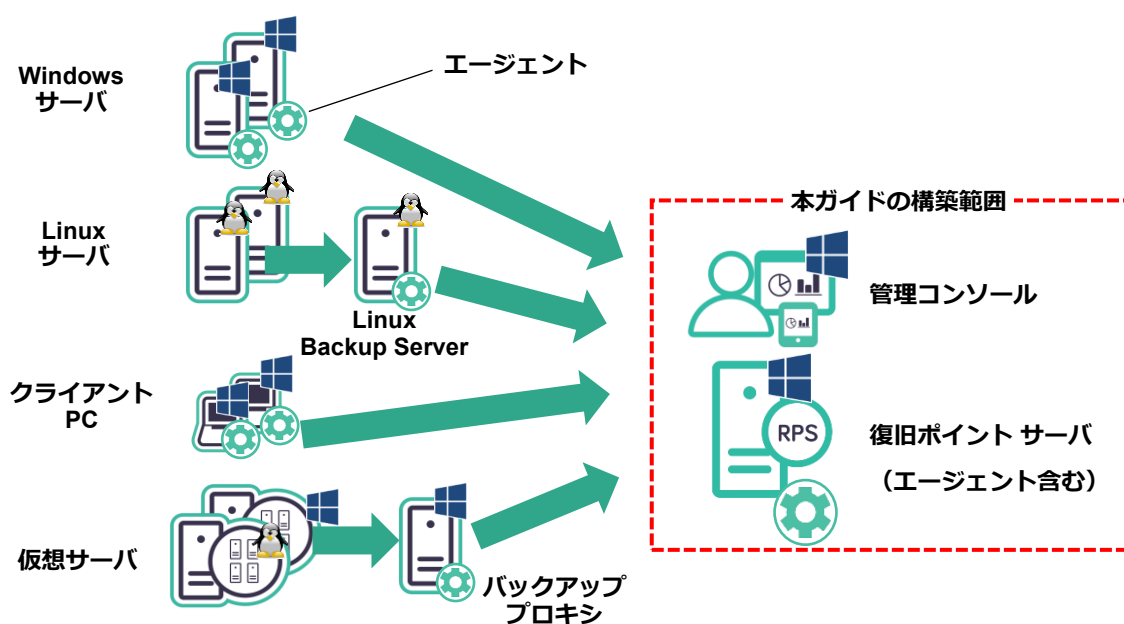
2024 年 11 月 Rev 1.0 リリース
2025 年 3 月 Rev1.1 Windows Server 2025 対応の記載追記
2025 年 5 月 Rev2.0 Arcserve UDP 10.1 対応
2025 年 12 月 Rev3.0 Arcserve UDP 10.3 対応



はじめに

Arcserve Unified Data Protection (以降 “Arcserve UDP” または “UDP”) は、「簡単」かつ「手頃」なディスクベースのシステム保護ソリューションです。単体サーバで構成される小規模なコンピューティング環境にも、複数サーバで構成される大規模なコンピューティング環境のニーズにも必要とされるバックアップ・リカバリ機能を提供します。ウィザードを使用して簡単な手順で短時間に導入が可能で、運用も自動で手間なく行えるので、管理の手薄な小規模拠点や部門でも安心してご使用いただけます。

本ガイドでは、バックアップ管理サーバを構築するための Arcserve UDP 製品の導入と初期設定方法を解説します。以下の図における「管理コンソール」と「復旧ポイント サーバ」を 1 台のサーバに構築することを想定していますが、導入先のサーバの性能によっては管理コンソールと復旧ポイント サーバを別サーバに分けて導入することもご検討ください。



<参考> Arcserve UDP のコンポーネントについて：

- **Arcserve UDP エージェント**

バックアップおよびリストアなど、さまざまな処理を実行します。

エージェント単体でバックアップ環境を構築することも可能ですが、コンソールや復旧ポイントサーバを組み合わせることで、統合管理や、仮想マシンのエージェントレス バックアップ、バックアップ データの重複排除、遠隔地への転送など、より効率的で安全なデータ保護環境を構築していただけます。

- **Arcserve UDP コンソール（管理コンソール）**

バックアップ対象や復旧ポイントサーバ、バックアップ設定などの管理を行う操作画面を提供します。

さまざまなバックアップ保護対象の統合管理を行う場合に導入します。

- **Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ（RPS : Recovery Point Server）**

バックアップ データ(復旧ポイント)を保管するデータ ストアを提供し、重複排除や別の RPS への遠隔転送も可能です。

※ ご利用のためには Arcserve UDP コンソールが必要です。

※ 復旧ポイントサーバと共に Arcserve UDP エージェント（Windows）と一緒にインストールされます。



1. インストール

本ガイドでは、Arcserve UDP 10.3 の Windows エージェント、復旧ポイント サーバ、コンソール 計 3 コンポーネントをすべて新規インストールする手順をご説明します。説明手順は、ご使用の環境により一部手順が異なる場合がありますのでご注意ください。インストールに必要なディスク要件は、環境により異なりますので下記動作要件をご参照下さい。

[Arcserve UDP 10.x 動作要件](#)

- ※ Windows Server 2012 / 2012 R2 サーバでは、Arcserve UDP 10.x の新規インストールは行えません。Arcserve UDP 8.x が新規インストールされた環境から Arcserve UDP 10.x へのアップグレードのみサポートされます。Arcserve UDP 10.x へのアップグレードの際には、Arcserve UDP コンソールのデータベースは、SQL Server 2017 Express Edition へアップグレードしてください。

Arcserve UDP 8.0 がインストールされた環境から Arcserve UDP 10.3 へのアップグレードを行う場合は以下をご覧ください。

[Arcserve UDP 10.3 のインストール・アップグレードについて](#)

1.1 Arcserve UDP 10.3 のインストーラ (インストール モジュール) について

Arcserve UDP 10.3 のインストーラには「フル インストーラ (Remaster) 」と「アップグレード インストーラ」の 2 種類があります。

新規インストールや Arcserve UDP 8.x/9.x からのアップグレード インストールには「フル インストーラ (Remaster) 」をご利用ください。

Arcserve UDP 10.0/10.1/10.2 からのアップグレード インストールまたは Linux Agent のインストールには、「アップグレード インストーラ」をご利用ください。

各インストーラについては以下からダウンロードしてください。

[Arcserve UDP 10.3 ダウンロード リンク](#)

1.2 インストール前の確認

インストールに関するドキュメント

Arcserve UDP 10.3 のインストール全般については以下をご確認ください。

[Arcserve UDP 10.3 について](#)

旧バージョンからのアップグレード方法については下記をご確認ください。

[Arcserve UDP 10.3 のインストール・アップグレードについて](#)

また、以下サイト内の「インストールに関連する注意/制限事項」 もご確認ください。

[Arcserve UDP 10.x 注意/制限事項](#)



リリース ノートの記載もご確認ください。

Arcserve UDP 10.3 [インストール/アンインストール/リモート展開に関する考慮事項](#)

インストールに伴うサーバ再起動について

OS 構成やアップデート状況により、インストール後に再起動を促される場合があります。

また、Arcserve UDP 10.x のインストールに伴って Microsoft .Net Framework 4.6 がインストールされることで、インストールの途中で再起動が要求される場合があります。



※ご使用になる機能によっては、より新しいバージョンの Microsoft .Net Framework が必要になる場合があります。詳細は[動作要件](#)をご参照ください。



1.3 インストールの実行

本ガイドでは、Arcserve UDP 10.3 の 復旧ポイント サーバ（Arcserve UDP エージェントを含む）、Arcserve UDP コンソールを新規でインストールする手順をご説明します。

個別のコンポーネントをインストール方法については、[3.1 インストールの種類](#)を参照してください。

説明手順は、ご使用の環境により一部手順が異なる場合がありますのでご注意ください。

[Arcserve UDP 10.3 インストールの開始]

Arcserve UDP をインストールするコンピュータに、Administrator または、Administrators グループのユーザでログオンします。「Arcserve Unified Data Protection」 インストール メディアをセットし、[setup.exe] を実行します。セットアップ ウィザードが開始されます。

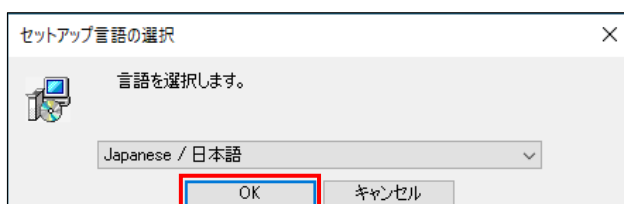
(1)

※[ダウンロード](#)した Arcserve UDP 10.3 のインストーラからもインストール可能です。

[セットアップ言語の選択]

[Japanese / 日本語] を確認し、[OK] をクリックします。

(2)



(3)

[使用許諾契約]

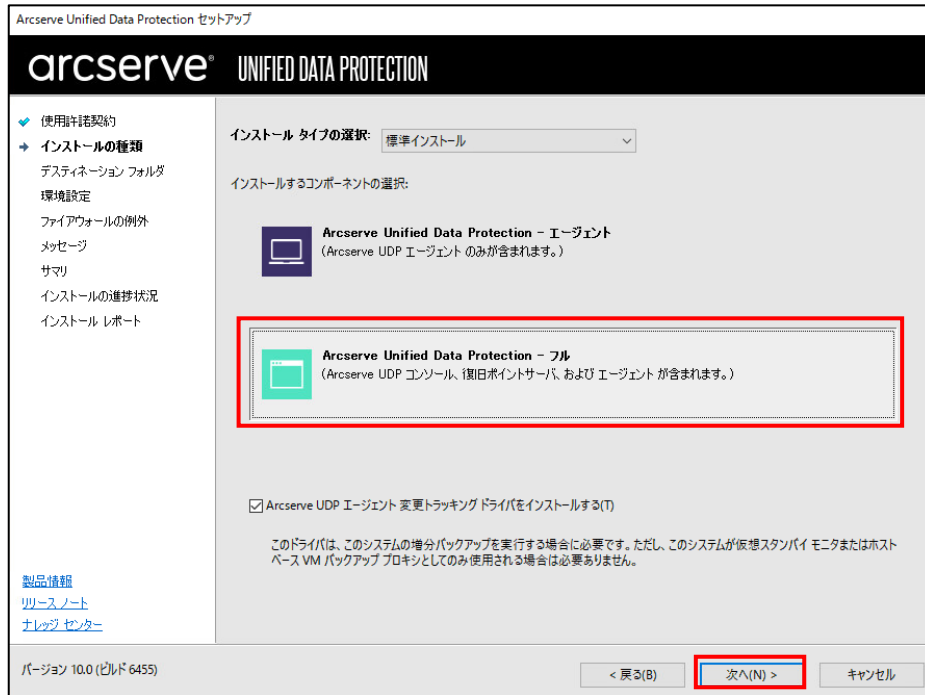
使用許諾契約を読み、同意する場合は [使用許諾契約の条項に同意します] を選択し [次へ] をクリックします。



[インストールの種類]

[インストールするコンポーネントの選択] で、[Arcserve Unified Data Protection – フル] を選択し、[次へ] をクリックします。

(4)



※インストールするコンポーネントを個別指定したい場合は、[3.補足情報](#) を参考に [インストール タイプの選択] メニューで [高度なインストール] を選択し、必要なコンポーネントを指定します。

(5)

[デスティネーション フォルダ]

インストール先のフォルダを確認し、[次へ] をクリックします。



[環境設定]

使用するプロトコルを「HTTPS」または「HTTP」から選択します。また、ブラウザでリモート管理を行うためのポート番号を確認します。デフォルトで設定されるポート番号はエージェントが「8014」、コンソールが「8015」です。ここで登録したポート番号を使用して UDP を操作します（本ガイドでは「HTTPS」（デフォルト）を選択しています）。Arcserve UDP で使用する Windows 管理者の名前 [ユーザ名] を確認し、[パスワード] を入力し、[次へ] をクリックします。

(6)

The screenshot shows the 'Environment Settings' (環境設定) screen of the Arcserve Unified Data Protection Setup Wizard. The left sidebar contains a list of steps: 'Use License Agreement', 'Installation Type', 'Destination Folder', 'Environment Settings' (selected), 'Firewall Exceptions', 'Message', 'Summary', 'Installation Progress', and 'Installation Report'. The main area is titled 'Environment Settings' and contains the following fields: 'Protocol' (HTTPS), 'Agent Port' (8014), 'Console Port' (8015), 'Username' (Administrator), and 'Password' (masked with dots). A note indicates that HTTPS is recommended for secure communication. At the bottom, there are radio buttons for 'Show all users' (selected) and 'Show current user only'. The 'Next (N) >' button is highlighted with a red box.

(7)

[データベースの設定]

UDP が使用するデータベースを設定します。標準では製品に添付された Microsoft SQL Server 2022 Express がインストールされます。内容を確認し、[次へ] をクリックします。

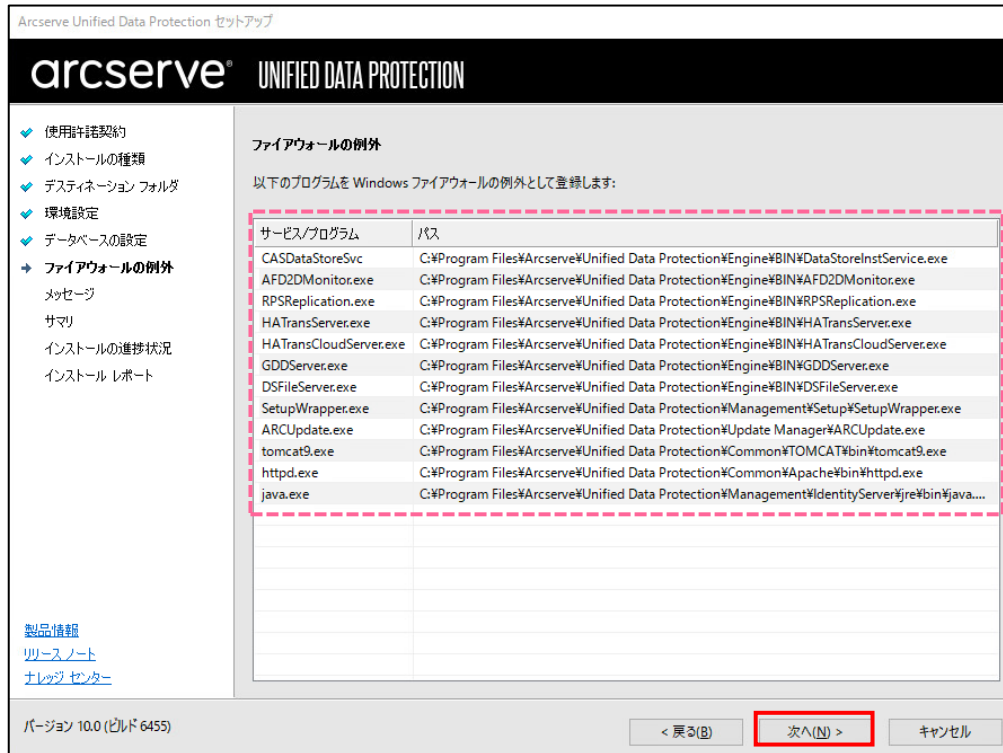
The screenshot shows the 'Database Settings' (データベースの設定) screen of the Arcserve Unified Data Protection Setup Wizard. The left sidebar is the same as in the previous screen, with 'Database Settings' (データベースの設定) selected. The main area is titled 'Database Settings' and contains the following fields: 'Database' (Microsoft SQL Server 2022 Express (含む)), 'Install Folder' (C:\Program Files\Microsoft SQL Server), and 'Data Folder' (C:\Program Files\Microsoft SQL Server). There are 'Browse...' buttons next to the folder fields. A checkbox for 'Overwrite existing database' is unchecked. The 'Next (N) >' button is highlighted with a red box.



[ファイアウォールの例外]

Windows ファイアウォールの例外として登録します。内容を確認し、[次へ] をクリックします。

(8)



(9)

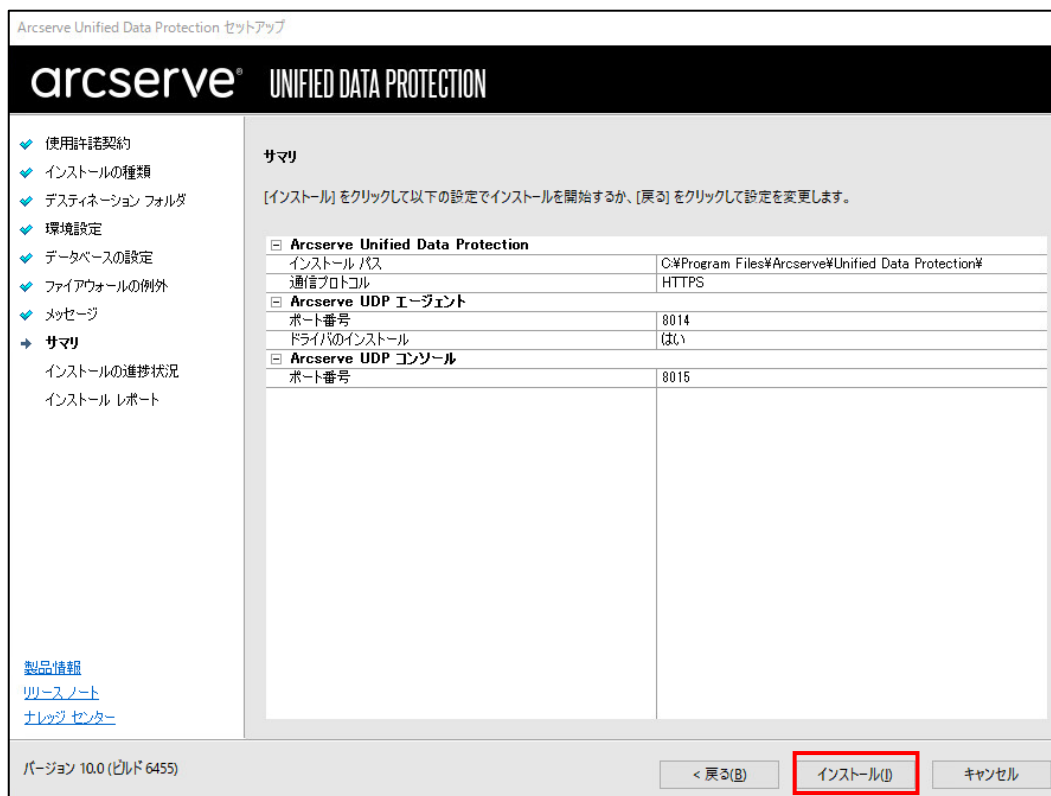
[メッセージ]

セットアップの検証が完了し、インストールの準備が整いました。[次へ] をクリックして進めます。



サマリが表示されるので内容を確認し、[インストール] をクリックします。

(10)



(インストールの進捗を確認できます)

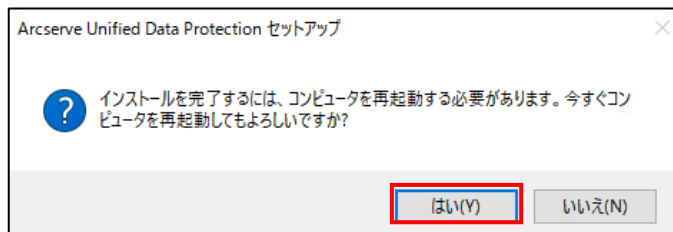


Microsoft .Net Framework のインストールに伴い、再起動を要求される場合があります。その場合は [完了] をクリックしてください。

(11)



その場で再起動する場合は、[はい] をクリックします。



再起動後は Windows OS にログオン後、もう 1 度本節の [手順 \(1\)](#) から実行してください。



[インストール レポート]

「インストールが完了しました」のメッセージを確認し、[完了] をクリックします。デフォルトは「更新を今すぐ確認する」にチェックが入っていて、インターネット接続環境であれば製品の更新を確認し、最新の状態にすることができます。



もしくはチェックを外し、更新を確認せずに [完了] させることもできます。インターネットに接続できない環境で更新を手動で適用する場合は以下をご利用ください。

- ・ [Arcserve UDP 10.x の個別パッチ](#)

[更新の確認] 画面からダウンロード経路の指定や、インターネット プロキシを使用するかどうかを選択できます。[更新] をクリックするとダウンロードが開始されます。



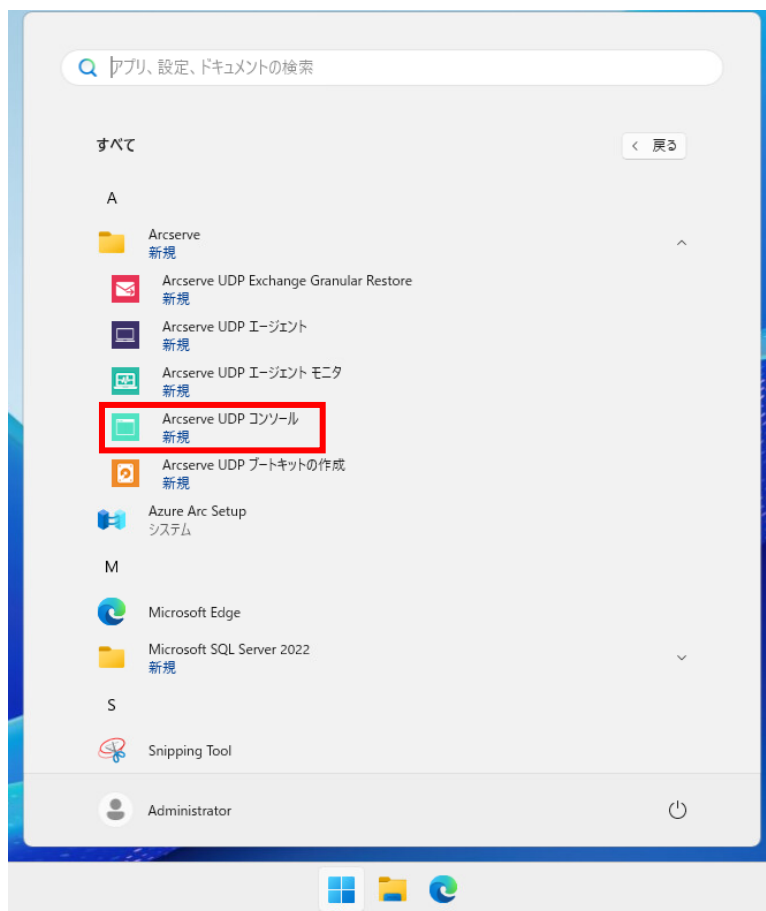
※更新に伴い、OS 構成やアップデート状況によってはサーバの再起動を求められる場合があります



1.4 コンソールへのログインとバージョンの確認

(1) [Arcserve UDP コンソールの起動]

インストール完了後、管理者権限のあるユーザ（ここでは Administrator）でログインし、スタートメニューから、[Arcserve UDP コンソール] を起動します。



既定のブラウザが起動します。

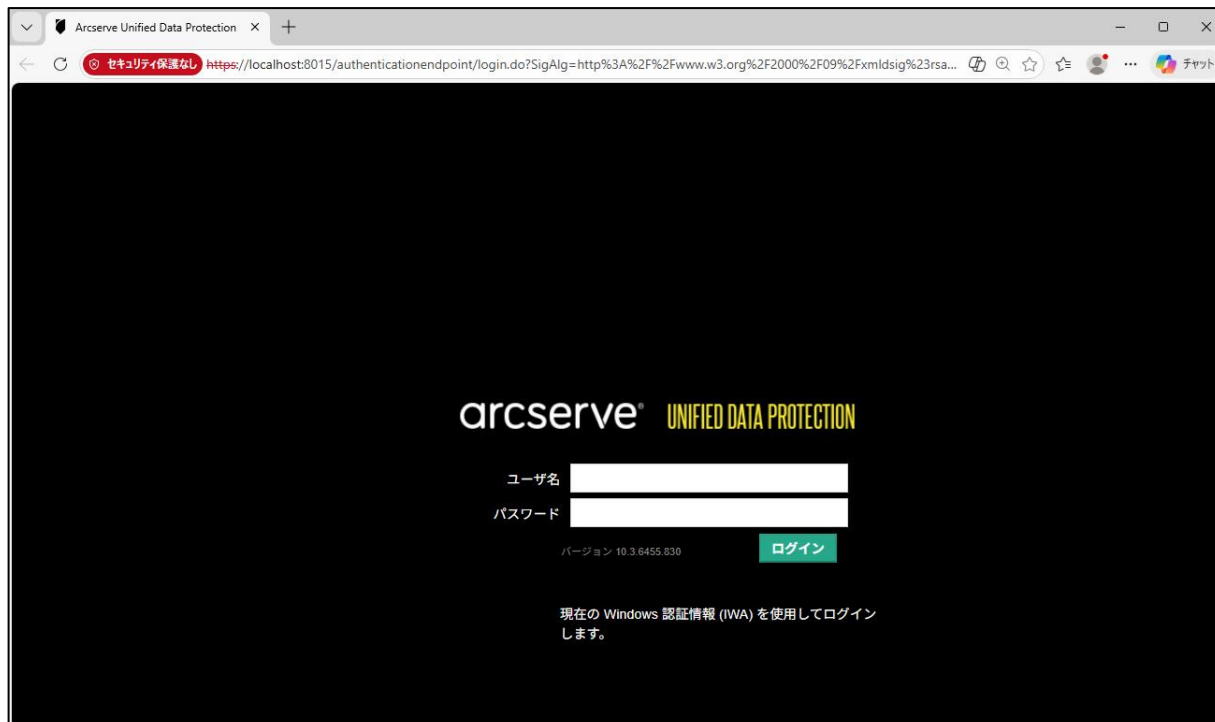
※ここでは Windows Server 2025 上の Microsoft Edge (バージョン 141.0.3650.80) での例を紹介します。

ご利用の OS やブラウザによってここでのメッセージや操作は異なります。

インストール時にプロトコルをデフォルトの HTTPS にしていると、デフォルトの証明書が証明機関によって識別されないため、Web ブラウザに警告が表示されます。[詳細設定] を展開し、[localhost に進む (安全ではありません)] を選択し続行します。警告を無視して続行してもネットワークで転送されるデータは暗号化されます。



UDP コンソールのログイン画面が表示されます。



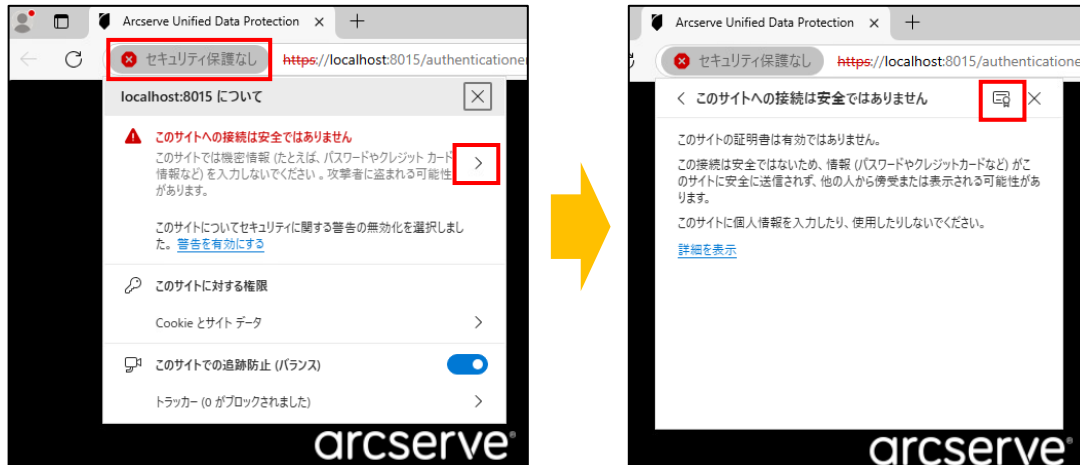
※「アイデンティティ サーバを開始しています。お待ちください..」のメッセージが出て、ログイン画面が表示されない場合、UDP のサービスが起動し終えるまで数分お待ちください。



以後、Web ブラウザ（Microsoft Edge）に警告を表示されないようにする場合は、以下のステップで証明書の追加が必要です。

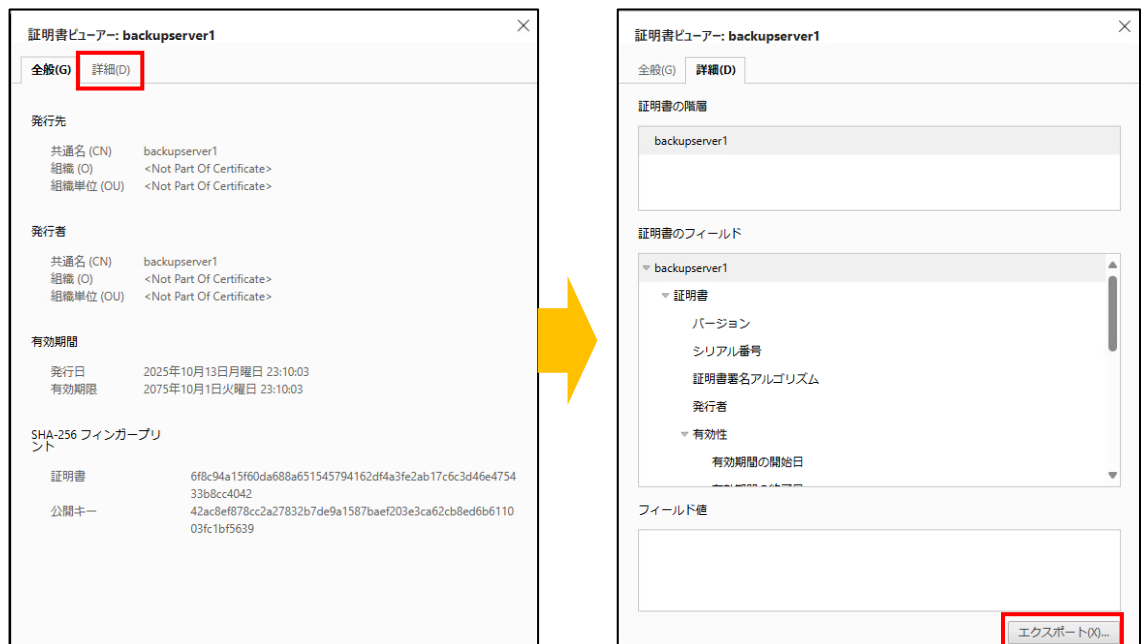
(ア) [証明書エラーの確認]

アドレスバーの [セキュリティ保護なし] をクリックし、続いて [このサイトへの接続は安全ではありません] の右側にある [>] をクリックして表示される [証明書の表示] のボタンをクリックします。



(イ) [証明書のエクスポート]

証明書を表示し、[詳細] タブをクリック、[エクスポート] をクリックします。



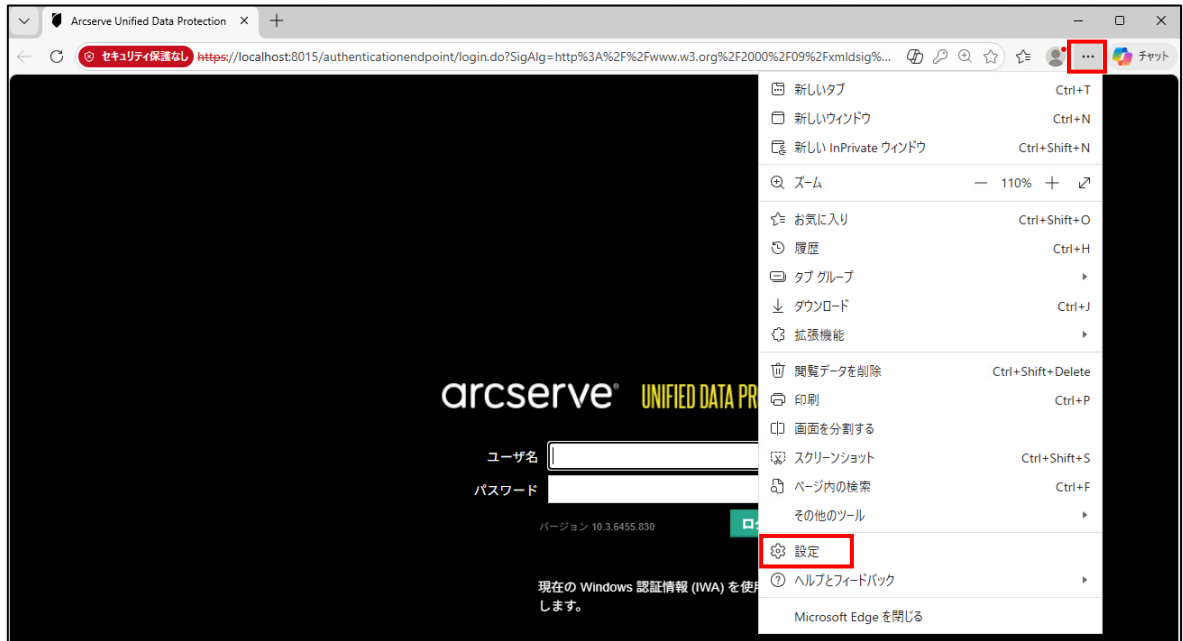
[名前を付けて保存] でファイルの保存場所を指定し、[ファイル名] で任意のファイル名を入力します。
[ファイルの種類] はデフォルトの [Base64 でエンコードされた ASCII、単一の証明書] のままで、[保存] をクリックします。



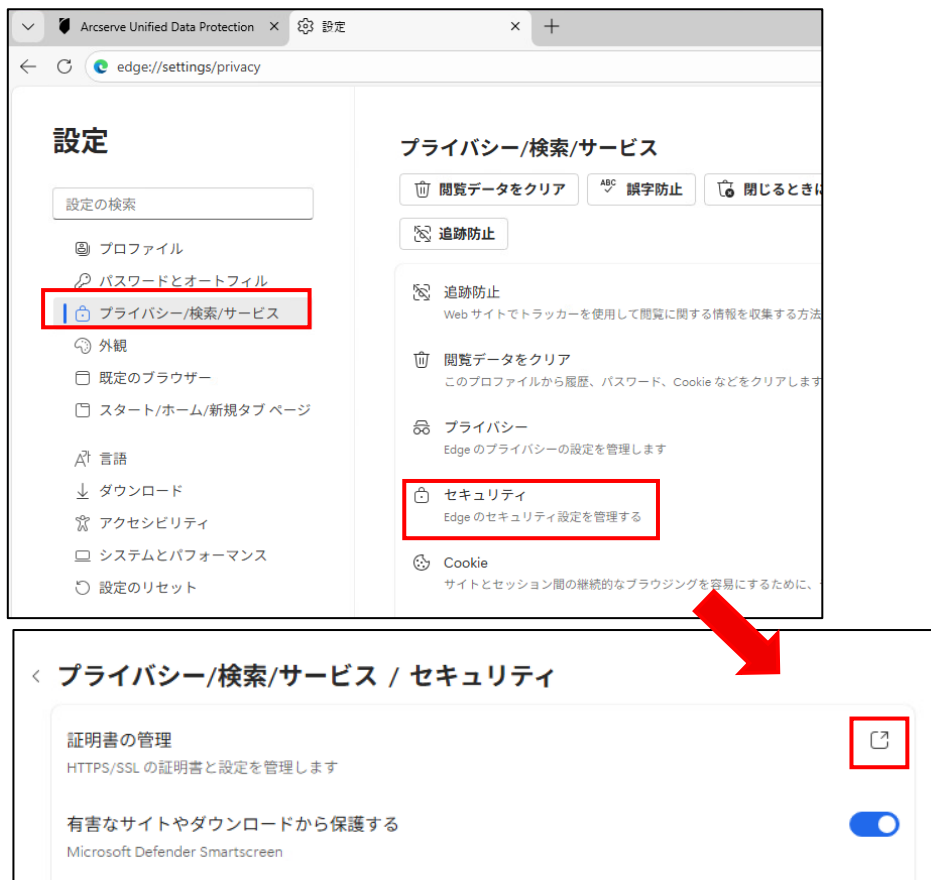
証明書ビューアーの画面を閉じます。

(ウ) [証明書のインポート]

Microsoft Edge の右上にある「…」をクリックしてメニューを表示し、[設定] をクリックします。



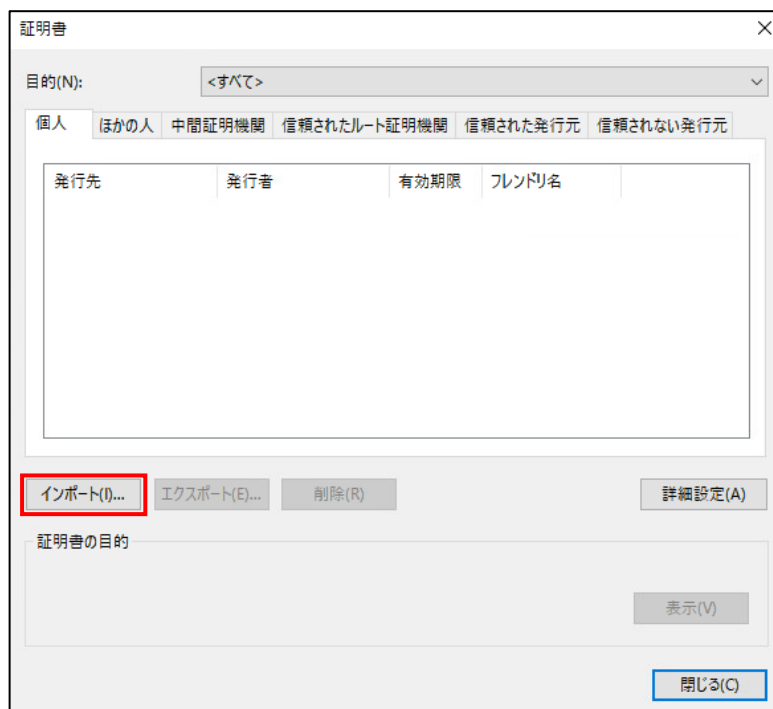
[設定]のメニューから[プライバシー、検索、サービス]を選択し、[セキュリティ] から [証明書の管理] 設定を展開するためのアイコンをクリックします。



[ローカル証明書] 画面で、[Windows からインポートされた証明書を管理] 設定を展開するためのアイコンをクリックします。

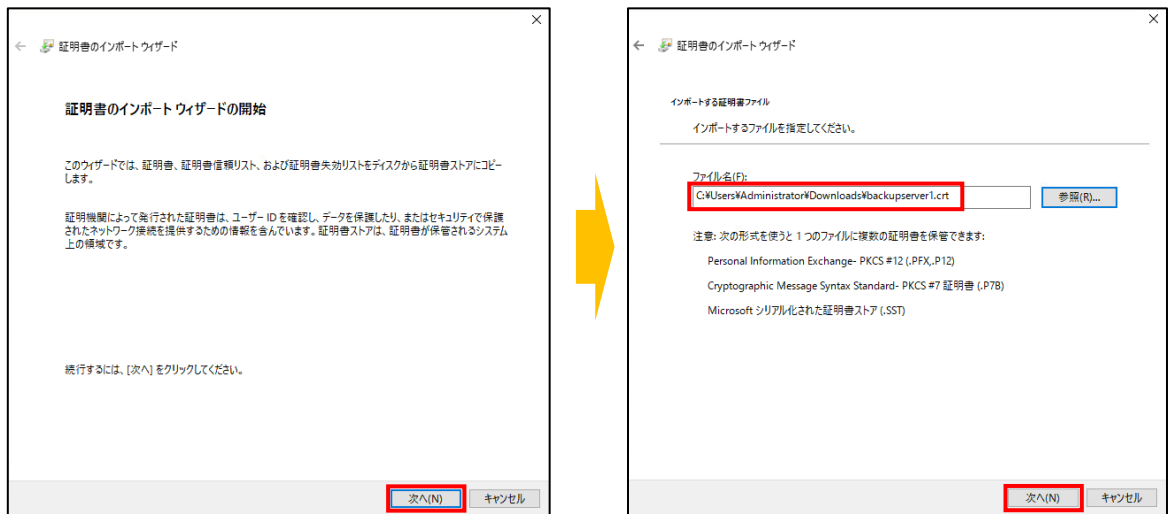


[証明書] 画面で、[インポート] をクリックします。



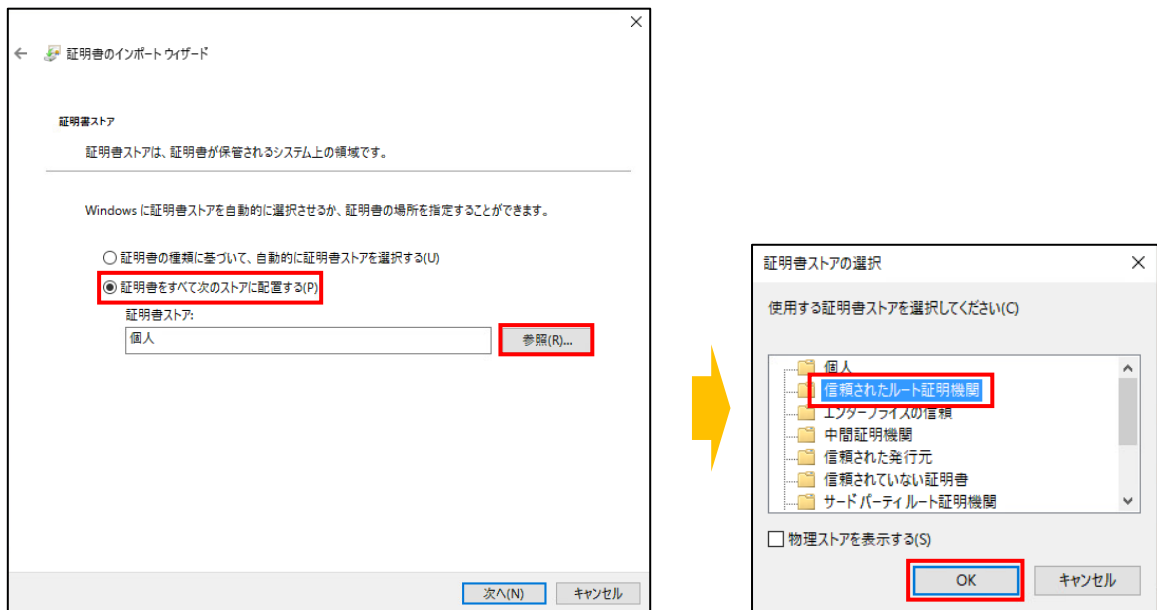
証明書のインポート ウィザード が表示されますので、[次へ] をクリックします。

インポートする証明書ファイルを指定しますので、先ほどエクスポートした証明書ファイルのパスを指定して [次へ] をクリックします。



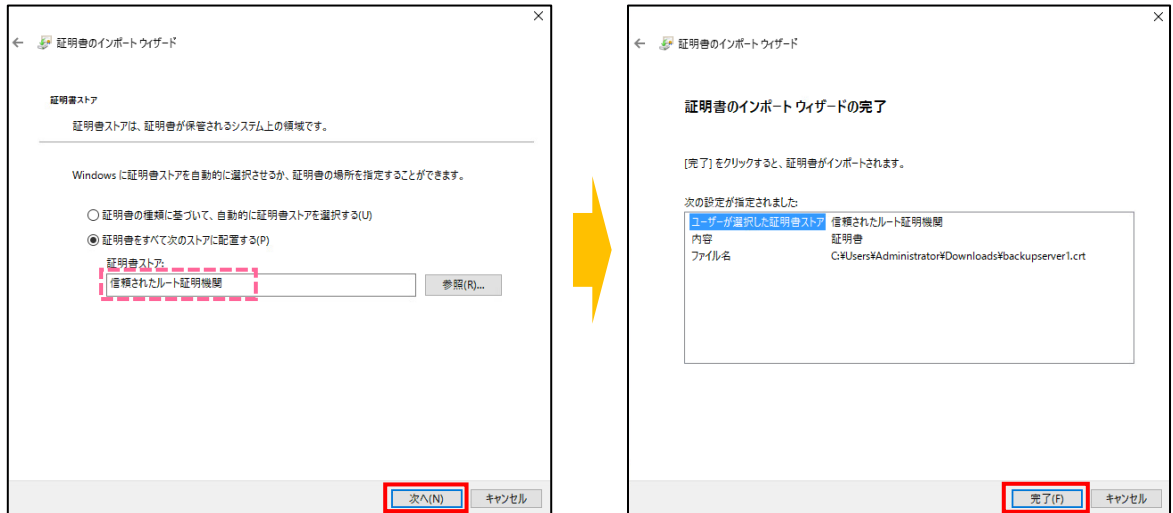
証明書ストアの場所として、デフォルトの [証明書をすべて次のストアに配置する] を選択したままで、[参照] をクリックします。

[証明書ストアの選択] 画面で、[信頼されたルート証明機関] を選択し [OK] をクリックします。

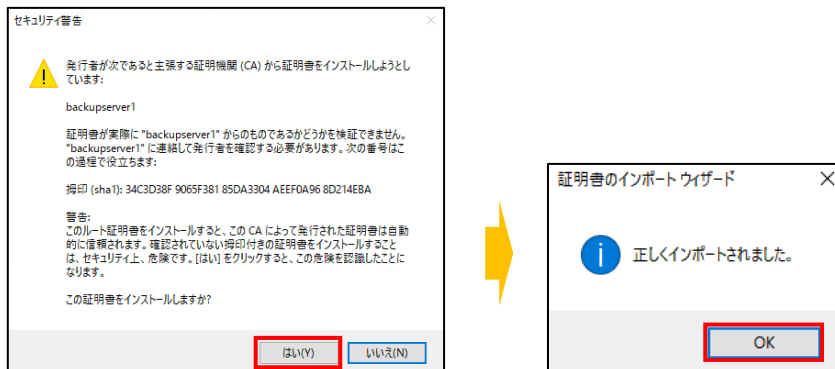


証明書ストアに “信頼されたルート証明機関” が追加されたのを確認し、[次へ] をクリックします。

証明書ストア、内容、ファイル名を確認し、[完了] をクリックします。



証明書をインストールする旨のセキュリティ警告画面が出てきますが、[はい] をクリックしインポートします。「正しくインポートされました。」のメッセージを確認したら [OK] をクリックします。

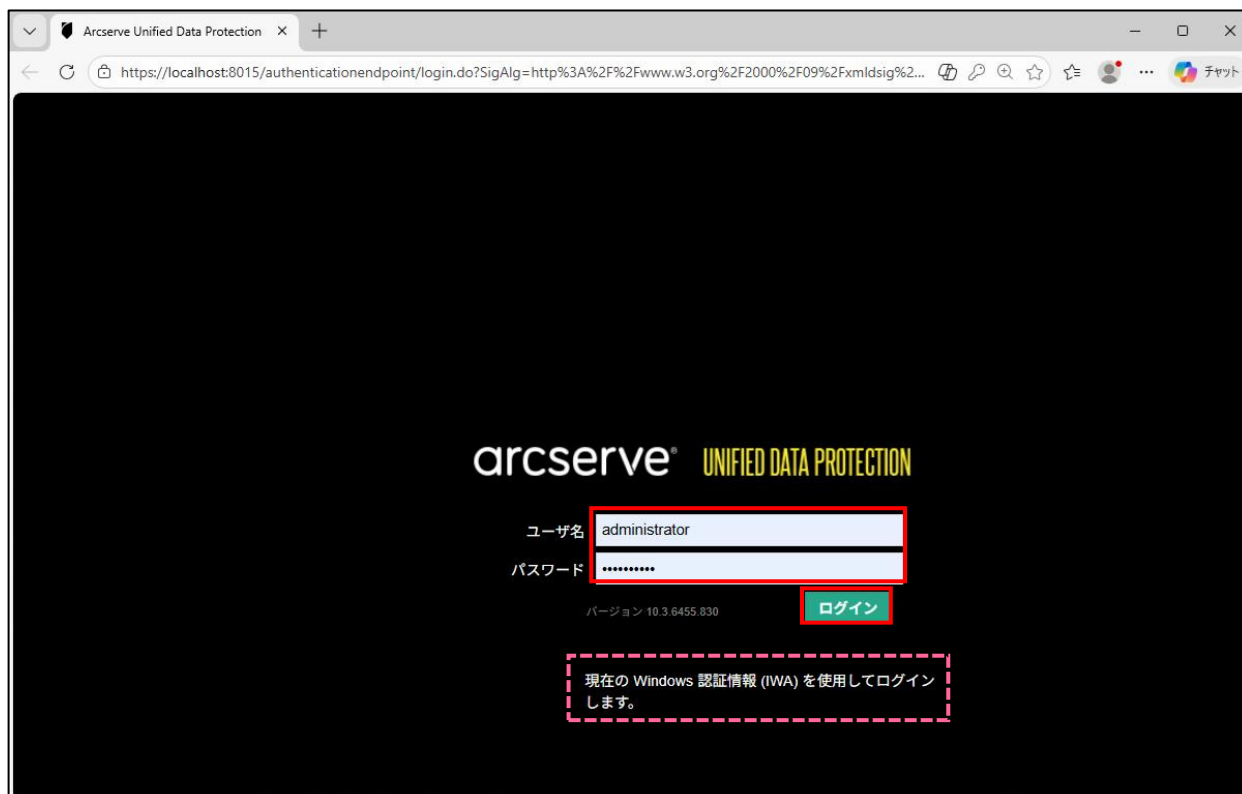


開いている設定画面を閉じ、ブラウザを再起動（Arcserve UDP コンソールを開きなおし）してください。

(2) [ログイン]

インストール時に指定したアカウントで、Arcserve UDP コンソールにログインします。ここでは「Administrator」アカウントでログインします。[パスワード] 入力し、[ログイン] をクリックします。

※ Arcserve UDP コンソールを導入したサーバ上で Arcserve UDP コンソールのログイン画面を開いている場合、[現在の Windows 認証情報 (IWA) を使用してログインします] リンクをクリックすることで、ログイン操作を行わずに Arcserve UDP コンソールを表示できます。



(3) [バージョン情報] の確認

ログイン後、画面右上の [ヘルプ] から、[バージョン情報] をクリックします。



(4) [バージョン情報]

バージョン、Build 番号などの確認ができます。

(Arcserve UDP 10.3)



1.5 ライセンス キーの登録

(1) [アクティベーションとライセンス]画面の表示

コンソールへのログイン完了後、[ヘルプ] から、[アクティベーションとライセンス] をクリックします。



[製品アクティベーション] の製品アクティブ化は 2025 年 12 月現在、日本では不要です。次の [ライセンス管理] 画面にてライセンスを登録してください。



(2) [ライセンス管理]

[ライセンス管理]を選択して下欄に 25 桁のライセンス キーを入力し、[追加]をクリックします。

アクティベーションとライセンス

製品アクティベーション **ライセンス管理** トライアルの延長

Arcserve UDP のライセンスを管理するには、ライセンス管理を使用します。このアクティベーションへのライセンス オーダーの追加、ライセンス プールの数量の更新、その他のアカウント全般の管理などを行う場合は、Arcserve ライセンス ポータルにログインしてください。

Arcserve ポータルを開く

Arcserve UDP ライセンス

ライセンス名	合計	空き容量	ライセンスなし
XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX			

追加 更新

ライセンスされたノード

ノード名	ノードタイプ
------	--------

ページ 1 / 1

閉じる ヘルプ

(3) 登録したライセンスの情報を確認し、[閉じる] をクリックし画面を閉じます。

アクティベーションとライセンス

製品アクティベーション **ライセンス管理** トライアルの延長

Arcserve UDP のライセンスを管理するには、ライセンス管理を使用します。このアクティベーションへのライセンス オーダーの追加、ライセンス プールの数量の更新、その他のアカウント全般の管理などを行う場合は、Arcserve ライセンス ポータルにログインしてください。

Arcserve ポータルを開く

Arcserve UDP ライセンス

ライセンス名	合計	空き容量	ライセンスなし
Arcserve UDP 10.x Advanced Edition - Socket	10	8	0

追加 更新

ライセンスされたノード

ノード名	ソケット数	ノードタイプ
------	-------	--------

ページ 1 / 1

閉じる ヘルプ

以上でインストール、およびライセンスの登録は完了です。



2. 運用開始のための設定

UDP インストール後、Arcserve UDP コンソールを起動すると、[環境設定ウィザード] が自動的に起動します。

このガイドでは、[環境設定ウィザード] を利用してバックアップ対象ノードを追加したり、復旧ポイントサーバ（今回はローカルのサーバ）のデータストアの作成や Windows サーバのバックアップ プランを作成する作成方法を解説します。



※ 環境設定ウィザードは1度終了してからも、Arcserve UDP コンソールの [リソース] タブ内で、任意のタイミングで実行することが可能です。



※ 環境設定ウィザードを使用せずに、個別にノードを追加や、データストアやバックアップ プランを設定していただくことも可能です。環境設定ウィザードよりも詳細な設定をしたり、後から設定の変更が可能です。

その場合、コンソールの [リソース] タブから設定を行います。詳細な手順はマニュアル「Arcserve UDP 10.x ソリューションガイド」の以下ページをご参照ください。

- ・ [ソース ノードの追加および管理](#)
- ・ [デスティネーションの追加および管理](#)
- ・ [データを保護するプランの設定](#)



2.1 環境設定ウィザード

(1) [Arcserve UDP 環境設定ウィザードへようこそ] 画面

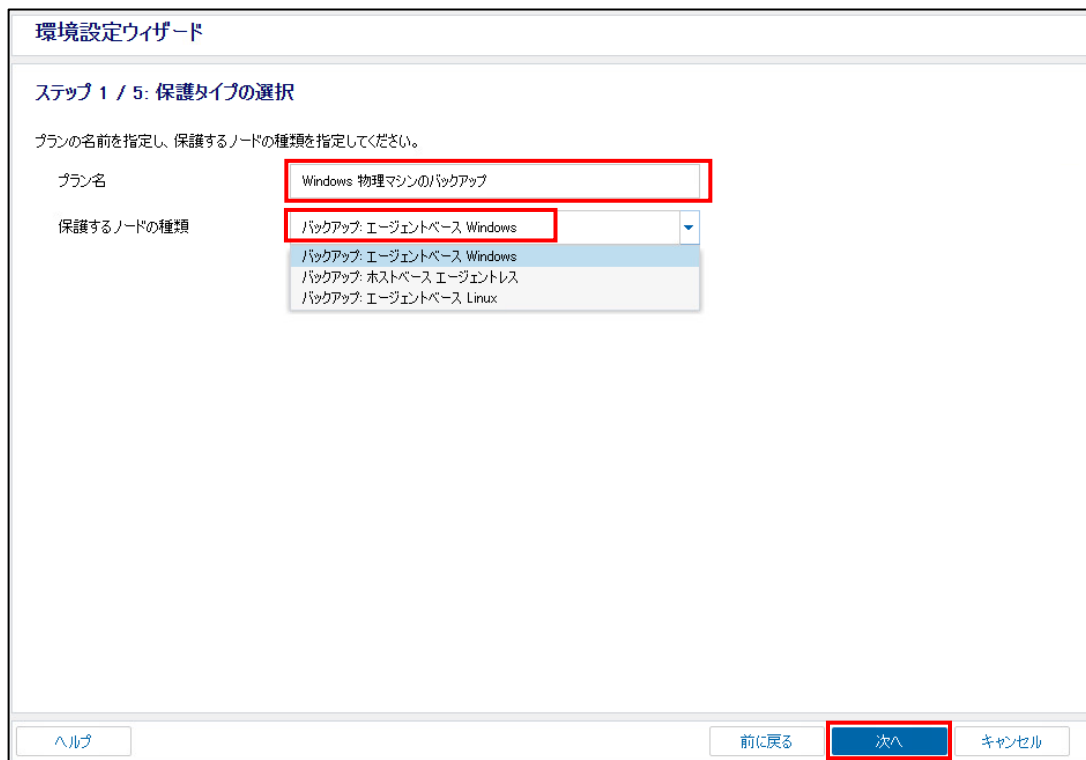
環境設定ウィザードを利用して、バックアップ プランを作成します。[次へ] をクリックします。



(2) [ステップ 1/5: 保護タイプの選択] 画面

[プラン名]に任意のプラン名を入力し、[保護するノードの種類]を選択し、[次へ]をクリックします。

本ガイドでは、[バックアップ : エージェント ベース Windows] を選択します。



(3) [ステップ 2/5: 保護するノードの追加] 画面

[ホスト名/IP アドレス] にバックアップ対象のノード名、[ユーザ名] と [パスワード] にバックアップ対象の認証情報、（必要であれば）[説明]に任意の説明を入力し、[リストに追加] をクリックします。右側の [ノード名] リストに保護対象が追加されることを確認し、[次へ] をクリックします。

環境設定ウィザード > プラン: Windows 物理マシンのバックアップ

ステップ 2 / 5: 保護するノードの追加

ノードを検出するために使用する方法を選択し、必要な情報を入力して、[リストに追加] をクリックします。

ホスト名/IP アドレスによる Windows ノードの追加

ホスト名/IP アドレス	ユーザ名	パスワード	説明
FileServer1	Administrator	-----	

リストに追加

ノード名

このプランによる保護対象のノードが選択されていません

ノード名

FileServer1

ヘルプ 前に戻る 次へ キャンセル

(4) [ステップ 3/5: デスティネーションの選択] 画面

バックアップ先を指定します。バックアップ先としては保護対象ノード上の場所や、ネットワーク共有、復旧ポイントサーバ（RPS）が利用可能です。RPS を指定する場合は、RPS に復旧ポイントの格納先となるデータストアを作成する必要があります。[データストア] - [作成] をクリックします。

環境設定ウィザード > プラン: Windows 物理マシンのバックアップ

ステップ 3 / 5: デスティネーションの選択

デスティネーションの種類を選択し、デスティネーションを選択または作成します。

デスティネーション RPS 上のデータストア

復旧ポイント サーバ backupserv1 追加

データストア [作成] をクリックしてデータストアを作成 作成(R)

☐ セッション パスワードの有効化

ヘルプ 前に戻る 次へ キャンセル

※ 本ガイドの [\[1.3 インストールの実行\]](#) に従っている場合は RPS を含むすべてのコンポーネントがインストールされていますので、デスティネーションの [復旧ポイント サーバ] にローカル サーバが表示されています。他の復旧ポイント サーバを指定する場合は、[追加] をクリックし登録を行います。

(5) [ステップ 3/5: デスティネーションの選択] - データストアの作成

[データ ストア名] を入力し、[データ ストア フォルダ] を指定します。デフォルトでは [データのデデブリケーション] のチェックがされており、バックアップ データの重複排除機能が有効になっています。本ガイドではデフォルト設定のまま作成を行います。

重複排除を有効化したデータストアを作成する場合、[データ ストア フォルダ] に加え、以下のフォルダを指定して [次へ] をクリックします。

- ・データ デスティネーション
- ・インデックス デスティネーション
- ・ハッシュ デスティネーション

環境設定ウィザード

ステップ 3 / 5: デスティネーションの選択 | データ ストアの作成

一般ルールを参照するか、デデブリケーションのストレージ容量要件を次で推定できます: [要件プランニングのクイックリファレンス。](#)

デデブリケーション、圧縮、暗号化を有効化または無効化する設定は、データ ストアの作成後は変更できません。

復旧ポイントサーバ: backupserver1

データ ストア名: DS1

データ ストア フォルダ: D:\DS1\DataStoreFolder [参照](#)

同時アクティブ ノードの制限: 4

☒ デデブリケーションの有効化

デデブリケーション ブロック サイズ: 16 KB [デデブリケーション](#) [デューバックアップ](#) [リストア](#)

ハッシュ メモリの割り当て: 21040 MB (最大: 32767 MB, 最小: 1024 MB)

☐ ハッシュ デスティネーションは SSD (Solid State Drive) 上にある

データ デスティネーション: D:\DS1\DataDestination [参照](#)

インデックス デスティネーション: D:\DS1\IndexDestination [参照](#)

ハッシュ デスティネーション: D:\DS1\HashDestination [参照](#)

[ヘルプ](#) [前に戻る](#) [次へ](#) [キャンセル](#)

※ 注意 :

デフォルトの設定の [デデブリケーションの有効化] では、重複排除時の比較処理でデータ量に応じメモリが消費されます。環境にて十分なメモリがあることをご確認ください。

デフォルトの [デデブリケーション ブロック サイズ] は、16KB です。デデブリケーション ブロック サイズは、4KB、8KB、16KB、32KB、64KB から選択可能で、これにより必要となるメモリおよびストレージ容量に影響があります。



必要となるメモリおよびストレージ容量については画面上部の [要件プランニングのクイック リファレンス] にて推定することができますので参考になしてください。

環境設定ウィザード

ステップ 3 / 5: デスティネーションの選択 | データストアの作成

一般ルールを参照するか、デデュPLICATIONのストレージ容量要件を次で推定できます [要件プランニングのクイックリファレンス。](#)

デデュPLICATION、圧縮、暗号化を有効化または無効化する設定は、データストアの作成後は変更できません。

復旧ポイントサーバ backupserver1

データストア名

データストアフォルダ

参照

同時アクティブ ノードの制限 4

「保存されるデータのサイズ」や「デデュプリケート可能なデータの推定割合」「圧縮するデータの推定割合」「デデュPLICATION ブロックサイズ」といったパラメータを入力することで、データ デスティネーション容量や推定ハッシュ デスティネーション容量、推定ハッシュ メモリ割り当て最小値を確認することができます。

メモリおよびストレージの要件の推定

格納されるデータ量の推定値、およびデデュプリケートおよび圧縮可能なデータの割合 (%) を入力します。ツールは次に、必要なデータ デスティネーション スペース、ハッシュ デスティネーション スペースおよび、ハッシュ メモリ スペースの見積もりを行います。

[デデュPLICATIONおよび圧縮について](#)

保存されるデータの推定サイズ 20GB 100000GB 10000

デデュプリケート可能なデータの推定割合 (%) 0% 100% 60

圧縮するデータの推定割合 (%) 0% 100% 30

ハッシュ デスティネーションは SSD (Solid State Drive) 上にある ☐

デデュPLICATION ブロック サイズ 16KB

推定データ デスティネーション容量:	2800.0 GB
推定ハッシュ デスティネーション容量:	10.0 GB
推定ハッシュ メモリ割り当て最小値:	10240.0 MB

OK

また、[Arcserve カタログセンター](#)に掲載のドキュメント「[Arcserve UDP 10.x サーバ構成とスペック見積もり方法](#)」もご参考になしてください。バックアップ対象データ量や運用要件に応じ、「コンソール」と「復旧ポイントサーバ」をインストールするサーバに必要なメモリ、ストレージ容量を計算します。



[データストア] が入力されたことを確認し、[次へ] をクリックします。

環境設定ウィザード > プラン: Windows 物理マシンのバックアップ

ステップ 3 / 5: デスティネーションの選択

デスティネーションの種類を選択し、デスティネーションを選択または作成します。

デスティネーション: RPS 上のデータストア

復旧ポイント サーバ: backupserver1

データストア: DS1

☐ セッション パスワードの有効化

追加 作成(R)

ヘルプ 前に戻る 次へ キャンセル

(6) [ステップ 4/5: バックアップ スケジュールの設定] 画面

バックアップスケジュールを確認し、[次へ] をクリックします。

デフォルトの設定では以下の設定が行われています。必要に応じてスケジュール変更してください。

- ・ UDP エージェントのインストール : ウィザード実行日の 21:00
- ・ 最初のバックアップ (フル バックアップ) : ウィザード実行日の 22:00
- ・ 日次バックアップ(増分) : 毎日 22:00

環境設定ウィザード > プラン: Windows 物理マシンのバックアップ

ステップ 4 / 5: バックアップ スケジュールの設定

Arcserve UDP エージェント インストール、最初のバックアップ、後続の日次バックアップのスケジュールを設定します。

UDP エージェントのインストール: 2024/10/23 21:00

最初のバックアップ (フル バックアップ): 2024/10/23 22:00

日次バックアップ (増分): 22:00

ヘルプ 前に戻る 次へ キャンセル



(7) [ステップ 5/5: 確認] 画面

プラン（保護のための設定）の詳細を確認し、[次へ] をクリックします。

プラン名	保護対象ノード	デスティネーションの選択	バックアップ スケジュール
Windows 物理マシンのバックアップ	1. エージェントベース	backupserver1 > DS1	最初のバックアップ: 22:00, 日 / 次バックアップ: 22:00

※注意：

バックアップ対象ノードにコンポーネントがインストールされていない場合、この後の操作により [UDP エージェントのインストール] のスケジュールに従って自動でリモートインストールを行います。

リモート インストールの際、約 3.0 GB のインストール モジュールが対象ノードに転送されます。転送に伴うネットワーク負荷や転送時間を削減したい場合、事前に手動にてバックアップ対象ノードでインストーラを実行してエージェントをインストールしてください。

環境設定ウィザードにて [完了] をクリックします。

次の手順

プランの環境設定が完了し、Arcserve Unified Data Protection を使用する準備ができました。Arcserve Unified Data Protection では、次のことが実行できます。

1. 保護するノードを追加します。
2. 仮想スタンバイ、ファイル コピー、レプリケーション、その他の多くの機能を使用してプランをカスタマイズします。
3. 復旧ポイント サーバおよびデータ ストアを含めることより、デスティネーションを追加します。

ウィザードを終了するには、[完了] をクリックします。

作成済みのプランの設定 (バックアップ対象、バックアップ先、スケジュールなど) を変更する場合、
[リソース] タブで左ペインの [プラン] - [すべてのプラン] から対象のプランを選択し、右クリックのメニューから [変更] をクリックして、設定を変更することができます。

The screenshot displays the Arcserve Unified Data Protection (UDP) 10.x web interface. The top navigation bar includes the Arcserve logo, 'UNIFIED DATA PROTECTION', and user information (administrator). The main navigation tabs are 'Dashboard', 'Resources', 'Jobs', 'Reports', 'Logs', and 'Settings'. The 'Resources' tab is active, showing a left sidebar with a tree view of resources. Under 'Plans', 'All Plans' is selected. The main content area shows a table of plans. A context menu is open for the 'Windows Physical Machine Backup Plan', with the 'Change' option highlighted.

プラン名	保護ノード	合計	ステータス		
Windows 物理マシンのバックアップ	1	1	0	0	変更: 成功 (1)

3. 補足情報

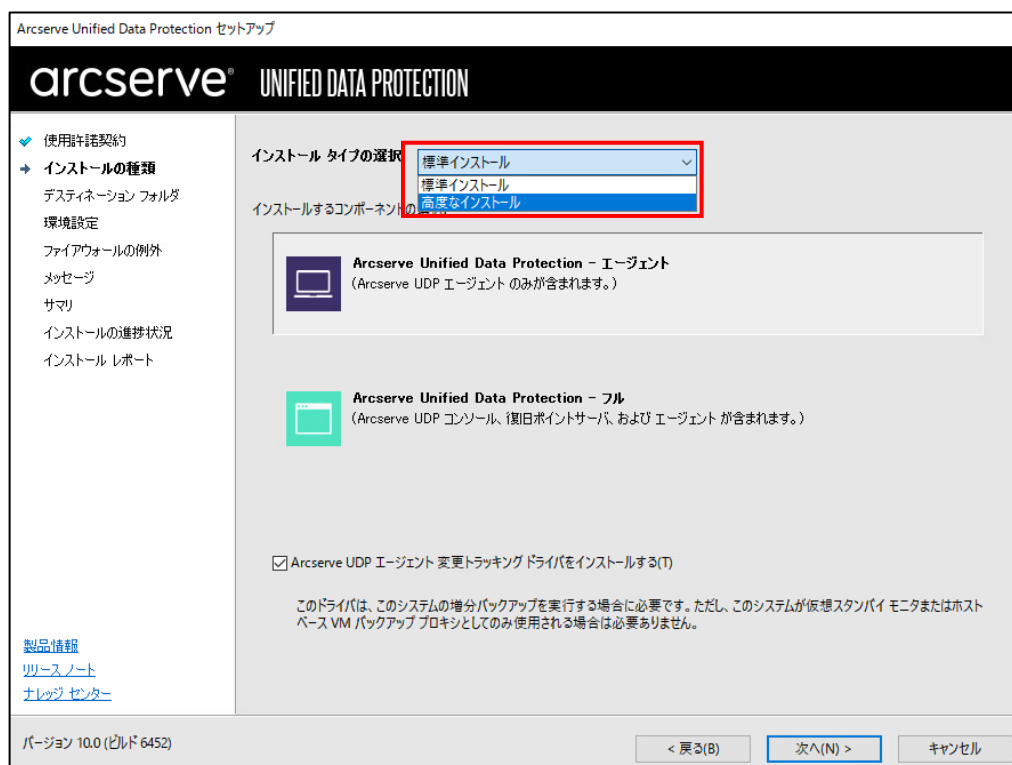
3.1 インストールの種類

Arcserve UDP 10.3 のセットアップ ウィザードにある [高度なインストール] で、以下の3つのコンポーネントから選択してインストールができます。

- ・ Arcserve UDP エージェント
- ・ Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ（自動的に Arcserve UDP エージェントも選択されインストールされます）
- ・ Arcserve UDP コンソール

[インストールの種類]

インストールするコンポーネントを個別に指定する場合、[インストール タイプの選択] で [高度なインストール] を選択します。



■ Arcserve UDP コンソールのインストール

[Arcserve UDP コンソール] のみ選択します。

Arcserve Unified Data Protection セットアップ

arcserve® UNIFIED DATA PROTECTION

使用許諾契約

→ **インストールの種類**

デスティネーション フォルダ

環境設定

データベースの設定

ファイアウォールの例外

メッセージ

サマリ

インストールの進捗状況

インストール レポート

製品情報

リリースノート

ナレッジセンター

インストール タイプの選択: 高度なインストール

インストールするコンポーネントの選択:

コンポーネント	ステータス
<input type="checkbox"/> Arcserve UDP エージェント	インストールされていません
<input type="checkbox"/> Arcserve UDP 復旧ポイントサーバ	インストールされていません
<input checked="" type="checkbox"/> Arcserve UDP コンソール	インストールされていません

Arcserve UDP コンソール

環境を一元管理し、そのステータスに関するレポートを生成します。Arcserve UDP コンソールを使用して、ノードの追加と削除、ハイパーバイザによって管理される仮想マシンのディスカバリ、プランの作成とノードへの割り当て、およびバックアップジョブ結果のレポートを行うことができます。

バージョン 10.0 (ビルド 6452)

< 戻る(B) **次へ(N) >** キャンセル

■ 復旧ポイント サーバのインストール

復旧ポイント サーバのみを構築する場合、[Arcserve UDP 復旧ポイント サーバ] を選択します。

復旧ポイント サーバ インストール時には自動的に [Arcserve UDP エージェント] もインストールします。

Arcserve Unified Data Protection セットアップ

arcserve® UNIFIED DATA PROTECTION

使用許諾契約

→ **インストールの種類**

デスティネーション フォルダ

環境設定

ファイアウォールの例外

メッセージ

サマリ

インストールの進捗状況

インストール レポート

製品情報

リリースノート

ナレッジセンター

インストール タイプの選択: 高度なインストール

インストールするコンポーネントの選択:

コンポーネント	ステータス
<input checked="" type="checkbox"/> Arcserve UDP エージェント	インストールされていません
<input checked="" type="checkbox"/> Arcserve UDP 復旧ポイントサーバ	インストールされていません
<input type="checkbox"/> Arcserve UDP コンソール	インストールされていません

Arcserve UDP 復旧ポイントサーバ

注: このサーバを使用するには、Arcserve UDP コンソールを使用して一元管理する必要があります。

革新的な復旧ポイントサーバテクノロジーにより、既存の Arcserve D2D テクノロジーに「インテリジェントターゲット」機能が追加され、Arcserve Unified Data Protection と呼ばれる新しいソリューションが誕生しました。

この新しいインテリジェントターゲット機能では、サイト間レプリケーションとソース側デデュプリケーションが統合されており、リソースを多く消費するストリーミングのサーバ負荷を軽減し、サイト間レプリケーションを高速化できます。その機能を活用して、

☒ Arcserve UDP エージェント 変更トラッキングドライバをインストールする(T)

このドライバは、このシステムの増分バックアップを実行する場合に必要です。ただし、このシステムが仮想スタンバイ モニタまたはホストベース VM バックアップ プロキシとしてのみ使用される場合は必要ありません。

バージョン 10.0 (ビルド 6452)

< 戻る(B) **次へ(N) >** キャンセル



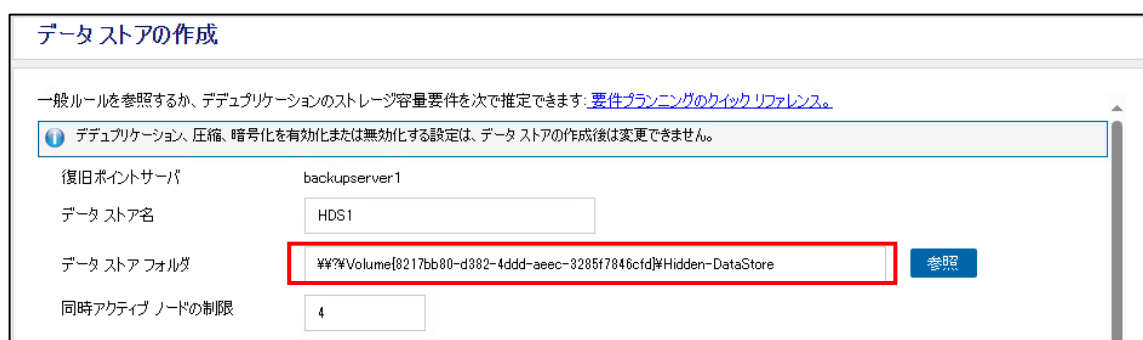
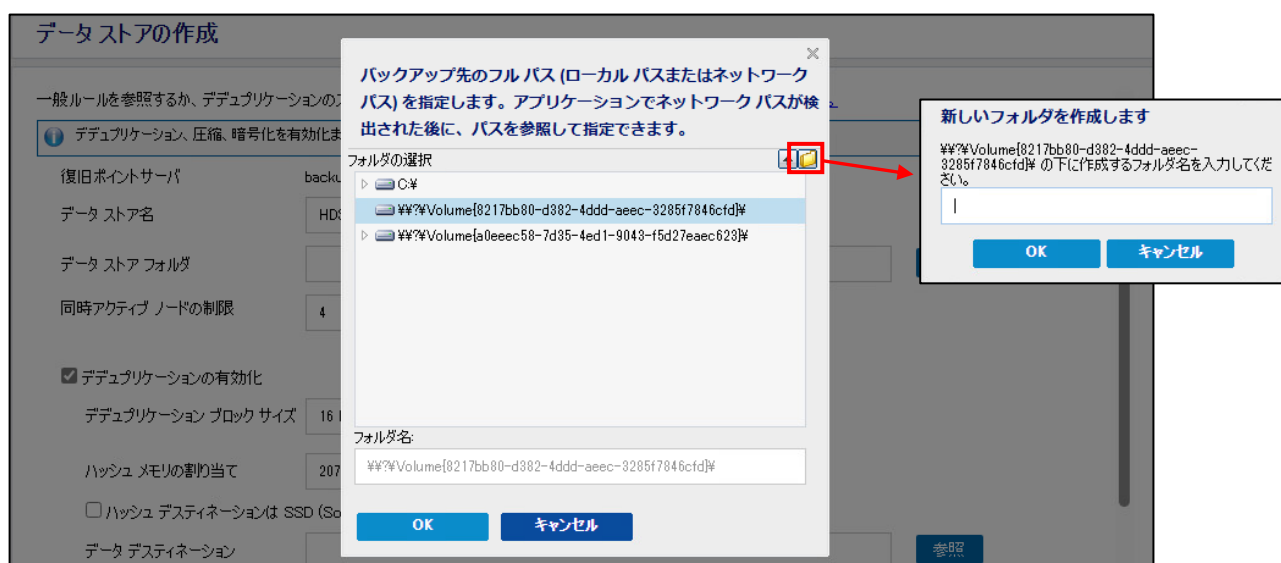
3.2 復旧ポイントサーバのセキュリティ強化

Arcserve UDP 8.0 以降では、バックアップ先としてドライブ文字が付与されていない「非表示ボリューム」上のフォルダを指定することが出来るようになりました。非表示ボリュームは Windows エクスプローラに表示されず、単純なパス指定でアクセスができないため、ランサムウェア攻撃やサーバへの不正アクセスによるバックアップデータの消去や改ざんのリスクを低減することができます。

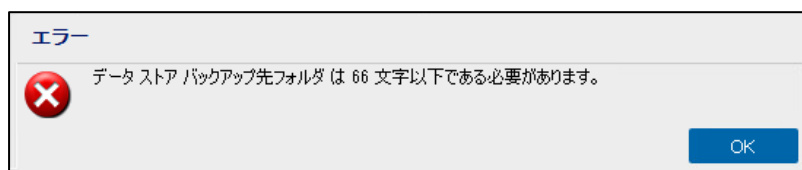
非表示ボリューム内のフォルダをバックアップ先にするためには、レジストリ エディタにて以下のレジストリキーの値を '1' に変更します（デフォルトは '0' となっています）。

`HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Arcserve\Unified Data Protection\Engine\ShowVolGuidPath`

これにより、バックアップ先として利用するフォルダの選択をする際に非表示ボリューム内のフォルダを選択できるようになります。ボリュームを選択し、右上の [新しいフォルダを作成します] アイコンでフォルダを作成し、指定できます。



※ 66 文字を超える長さのフォルダ パスを指定した場合は、データストア作成時にエラーとなり、次のステップに進めません。非表示ボリュームを含むパスは長くなる場合が多いため、フォルダ階層を浅くしたりフォルダ名を短くするなどして、パス長が 66 文字以下になるように調整してください。



3.3 多要素認証の設定

多要素認証により、Arcserve UDP コンソールに不正アクセスされ、バックアップ データを改ざんや削除されてしまうリスクを低減できます。

本機能を有効にすると、Arcserve UDP コンソールにログインするために、通常の管理ユーザ名とパスワードによる認証に加えて、スマートフォンの認証アプリケーションや、管理者の設定したアドレスに届く電子メールで確認が必要なワンタイム パスワードの入力が要求されるようになります。これにより、攻撃者が Arcserve UDP コンソールに不正アクセスすることが、より困難になります。

Arcserve UDP の多要素認証には、以下の2つの方式があります。

■ TOTP (Time-based One-Time Password)

Google Authenticator アプリケーションや Microsoft Authenticator アプリケーションなどのモバイル認証アプリケーションや、Chrome ブラウザの認証システム拡張機能で確認コード（ワンタイム パスワード）を取得します。

※ 注意：

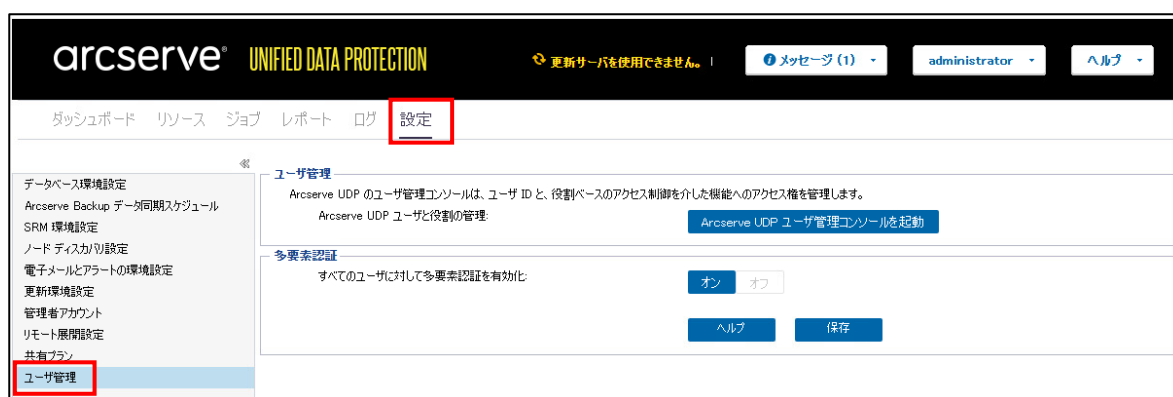
- ・ 認証システムを利用するモバイル機器と Arcserve UDP コンソールを導入するサーバは、タイムゾーンや時刻設定を一致させておく必要があります。ワンタイム パスワードは、それぞれの環境のローカルで、時刻を元に生成します。
- ・ 認証システムを利用するモバイル端末を紛失したり、機種変更をして登録済みのアカウントにアクセスできなくなってしまうと、確認コードを取得できなくなります。そのため、以下の対策を講じてください。
 - MOTP も併せてご利用いただく
 - 認証アプリ側でアカウントのバックアップを取る方法や機種変更時の移行方法を確認して備えておく

■ MOTP (Mail-based One-Time Password)

電子メールを利用してワンタイム パスワードを取得します。

多要素認証を利用するには、以下の設定を行ってください。

- (1) Arcserve UDP コンソールの [設定] タブをクリックし、左側のツリーから [ユーザ管理] を選択します。



- (2) [多要素認証] の [すべてのユーザに対して多要素認証を有効化] の [オン] をクリックします。

多要素認証

すべてのユーザに対して多要素認証を有効化:

☒ オン ☐ オフ

ヘルプ 保存

- (3) TOTP (Time-based One-Time Password) を利用される場合は、画面に表示された QR コードをスマートフォンなどのデバイスにインストールした Google Authenticator もしくは、Microsoft Authenticator で読み取って登録します。

多要素認証

すべてのユーザに対して多要素認証を有効化:

☐ オン ☒ オフ

ログインしたユーザの QR コード画像:



[秘密鍵の更新](#)

☐ 電子メール OTP の有効化 (オプション)

ヘルプ 保存

ユーザの QR コードのリセット:

QR コードのリセット

- (4) MOTP (Mail-based One-Time Password) を利用される場合は、[電子メール OTP の有効化] にチェックを入れ、[設定] ボタンをクリックしてメール サーバやメール アカウントの設定を行い、[OTP コードを受信する電子メール ID:] に確認コードの送信先となるメールアドレスを入力します。

多要素認証

すべてのユーザに対して多要素認証を有効化:

☐ オン ☒ オフ

ログインしたユーザの QR コード画像:



[秘密鍵の更新](#)

☒ 電子メール OTP の有効化 (オプション)

電子メール設定:

設定

OTP コードを受信する電子メール ID:

xxxxxx@xxxxxx.co.jp

テスト電子メールを送信

ヘルプ 保存

ユーザの QR コードのリセット:

QR コードのリセット

電子メールの設定

メール サーバ: xxxxxx.xxxxx.jp

ポート: 50

認証が必要: ☒

アカウント名: xxxxxx

パスワード:

差出人: xxxxxx@xxxxxx.co.jp

☐ STARTTLS の送信

OK キャンセル

- (5) MOTP の設定後は、必ず [テスト電子メールを送信] を実行し、指定したメールアドレスに問題無くテストメールが届いているかを確認してください。

TOTP の設定を行っておらず、MOTP の設定が間違っている場合は Arcserve UDP コンソールにログイン出来なくなります。

OTP コードを受信する電子メール ID: xxxxxx@xxxxxx.co.jp

ヘルプ 保存

ユーザの QR コードのリセット: QR コードのリセット

テスト電子メールを送信

- (6) 設定に問題無いことを確認したら、[保存] ボタンをクリックします。

多要素認証

すべてのユーザに対して多要素認証を有効化: オン オフ

ログインしたユーザの QR コード画像:

秘密鍵の更新

☒ 電子メール OTP の有効化 (オプション)

電子メール設定:

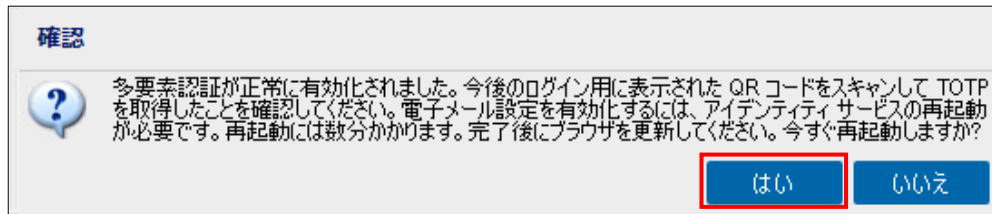
OTP コードを受信する電子メール ID: xxxxxx@xxxxxx.co.jp

ヘルプ 保存

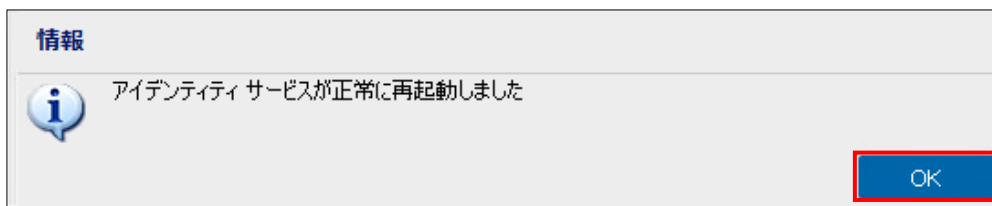
ユーザの QR コードのリセット: QR コードのリセット

テスト電子メールを送信

- (7) 多要素認証を有効にするため、アイデンティティ サービスの再起動の確認メッセージが表示されますので、[はい] をクリックします。



- (8) アイデンティティ サービスの再起動が終了したメッセージが表示されますので、[OK] をクリックします。



- (9) 多要素認証が利用出来ることを確認するため、Arcserve UDP コンソールをログアウトして、通常のログイン画面でユーザ名とパスワードを入力し、[ログイン]をクリックします。



- (10) 確認コードの入力画面で、TOTP で登録した認証ツールに表示される確認コードを入力して[認証]をクリックし、Arcserve UDP コンソールへのログインを完了させます。

The screenshot shows the Arcserve Unified Data Protection login interface. At the top, the logo 'arcserve®' and 'UNIFIED DATA PROTECTION' are displayed. Below this, a message in Japanese asks the user to enter a confirmation code generated by a mobile application or received via email. A text input field labeled '確認コード' (Confirmation Code) is highlighted with a red border. Below the input field are two buttons: 'ヘルプ' (Help) and '認証' (Authenticate), with the '認証' button also highlighted by a red border. Further down, there is a link '電子メールで確認コードを取得する' (Get confirmation code via email). Two notes are provided: one explaining how to receive the code via email (Settings -> User Management -> Email ID), and another advising to contact support if login fails.

- (11) MOTP であれば [電子メールで確認コードを取得する] をクリックし、指定したメールアドレスで受信したメールに記載されている確認コードを入力し、[認証] をクリックします。尚、TOTP および MOTP 共に確認コードの有効期限は 30 秒です。

This screenshot is identical to the one above, showing the same login interface. However, the 'ヘルプ' (Help) button is highlighted with a red border instead of the '認証' (Authenticate) button. The '電子メールで確認コードを取得する' (Get confirmation code via email) link remains visible below the buttons.

4. 製品情報と無償トレーニング情報

製品のカatalogや FAQ などの製品情報や、動作要件や注意事項などのサポート情報については、ウェブサイトより確認してください。

4.1 製品情報および FAQ はこちら

Arcserve シリーズ ポータルサイト

<https://www.arcserve.com/ja/>

動作要件

<https://support.arcserve.com/s/article/Arcserve-UDP-10-X-Software-Compatibility-Matrix?language=ja>

注意 / 制限事項

<https://support.arcserve.com/s/article/2024110101?language=ja>

製品ドキュメント

<https://support.arcserve.com/s/article/Arcserve-UDP-10-0-Documentation?language=ja>

サポート / FAQ

<https://support.arcserve.com/s/article/205002865?language=ja>

Arcserve Unified Data Protection ダウンロード情報

<https://support.arcserve.com/s/topic/0TO1J000000I3ppWAC/arcserve-udp-patch-index?language=ja>

Arcserve カタログセンター

<https://www.arcserve.com/ja/jp-resources/catalog-center>

4.2 トレーニング情報

無償トレーニング

トレーニング ルームによる受講形式もしくはリモートからの操作による形式で、半日で機能を速習する Arcserve シリーズのハンズオン トレーニングを開催しています。またいつでもご視聴頂けるオンライン トレーニングも実施しております。

どなた様でもご参加いただけますので、この機会にご活用ください。

(注：競業他社の方はお断りしております。)

<https://www.arcserve.com/ja/seminars>

